

第 11 号

発行

小松同窓会本部

〒923 小松市丸内町二ノ丸15

石川県立小松高等学校内

同窓会報編集委員会

委員長 宮崎 榮

印刷 北勝印刷株式会社



謹賀新年

平成八年元旦



理想と友情の時代

石堂清倫

私が在学したのは大正六年から十年春までの四年間でした。世界戦争の最中で、入学第一年にロシア革命がおこり、二年のとき米騒動がありました。幼い私たちがさえ人類の前途に暗雲がただよっていることが感じられました。東大在学中の円地と四松先輩がロイド・ジョージについて講演をされ、上級生の北村喜八さんがトルストイズムについて演説をするといった時代です。

生徒のあいだに回覧誌のサークルや、「精神修養」のサークルがあり、その一つである春辺会に私も入会しました。戦争成金の風潮に反対して理想主義の目標をかかげる小さな団体でしたが、そこで生れた友情は生涯つづきました。

夏休みには安宅や小塩で数日間臨海生活を送り、先輩から啓蒙される機会がありました。

スポーツもやりました。私は野球や庭球が不得手で、水泳とボートに熱中しました。学校では梯川の河口で二週間の水泳講習をやっていました。東大水泳部の円地さんと、五高へ入学したばかりの万仲余所治さんが教師でした。昼食は学校が茄子の味噌汁を出すのですが、それが大変においしかったことを今でも思い出します。一年生の私は金植組でしたが、どうしたことが五年生の中谷吉郎さん

もおなじ組でした。それが裸のつきあい、四高ではおなじ弓道部に籍をおき、そのためながく交際がつづくことになりました。十日目の遠泳試験ははじめ一町のつもりでしたが、どうにか五十町まで泳げました。教わったのは煽り足中心の水府流と観海流で、クロール泳法はまだ一般化していなかったのでしょうか。



春辺会の面々(大正九年三月撮影)

— 五年生を見送る会の記念写真 —

- 後列左より 打田與一(3) 良雄(4)
 - 中沢好一(3) 勝木新次(4) 坂田嘉平(2)
 - 今川 尚(4) 勝木保次(2) 道下佐一郎(3)
 - 石堂清倫(3) 秋山与作(4)
 - 中列左より 杉本勝夫(3) 松田精隆(5)
 - 本田太治(5) 宮川精一郎(5) 園山武雄(1)
 - 前列左より 氏名不詳(1) 加登周一(1)
 - 船岡正男(1)
- カッコ内は当時の学年、敬称略

ボートは、春辺会員に非力のものが多く、前後七回もボートレースに出漕し、いつもビリでした。しかしボートの歌をいくつか教わり、なかには Row, Row, Row, you Boat... というのもありました。

日頃はボート部長の中村速見先生のつぐられる表にしたがい、公平な練習時間を守ったものです。最後の三組が上って艇の清掃を終えて帰途につくのはもう夕暮れでしたが、先生は連日私たちを見送ってから帰られました。手入れがよかったため小松のボートは長持ちしたそうです。今ならハイキングというのですが、会員はよく遠足にでかけました。今江の三湖台や那谷寺は何回も行っています。

一年に一度くらい粟津・片山津・山代・山中とまわり、一つ一つ総湯に入ったこともあります。二年のときは六名のもものが白山に登りました。

小松中学の欠点は図書室がよくなかったことです。生徒が四人とは入れない狭い室で備付の本は百冊とはなかったのです。しかし、町には文学書中心の蔵書家もあり、伝手を求めて借覧することはできました。町には古い代議士の駒田さんのところに大英百科全書があり、ときどき見に行ったこともあります。私の最大の図書室は先輩の中沢直吉さんの押入で、そこには新潮社の本や高校の教科書があり、手あたりしだいに借りだして濫読をしました。

学校生活は平穏でしたが一度だけ波瀾

がありました。何が直接の原因であるのか思いだせませんが、四年の勝木新次、今川尚の二君と三年の私が相談をして、控所の黒板いっばいに「自由要求の宣言」を書きつらねました。放課後校長室へ呼びだされ、島田敬恕先生から、この宣言を自発的に消すことを求められました。私たちはそれに従うのを拒み、連日校長室で問答がくり返され、そのあいだ中全校生徒はこの宣言を読むことができませんでした。校長先生が一方的に消さないで、私たちを懇々と諭されたのでした。いろいろ学校騒動の話聞いていますが、島田先生のような方は一人もなかったでしょう。先生のことを思いだすたびに頭が下がるのです。

四年の中学生生活は、大正デモクラシーの開花期だったのでしょう。幼い私たちには理想が燃えていました。そしてそれを支えあう友情がありました。 (中学19回)

【著者略歴】

一九〇四年四月五日生。
一九一七年小松中学校、二
一年第四高等学校、二四年東
京帝国大学文学部英吉利文学

科入学。

一九三四年日本評論社出版
部、一九三八年南滿州鉄道株
式会社調査部に勤務。四七年
から四九年七月まで大連日本
人労働組合、日本人消費組合、

創立九十六周年記念講演会要旨

出会いを大切に、視野を広く
積極的に挑戦しよう

レジャー評論家・元朝日新聞編集委員
吉原 暢 雄

引揚委員会事務局で働く。
四九年十月帰国。国民文庫
社創立。マルクス主義文献を
刊行。東京グラムムシ會、運動
史研究会を創立。翻訳や著述
に従事して今日に至る。
なお、小松高校図書館には
氏の激動の人生の軌跡をつづ
た、『わが異端の昭和史』正・
続二編がある。

私の今日お話をすることを結
論から先に申し上げますと、
詩人の高村孝太郎が「僕の前
に道はない。僕の後ろに道は
できる」と言っています。つ
まりフロンティア精神を持と
う、ということ。もう一つは、
アメリカのベンジャミン・フ
ランクリンが言った「時間を
浪費するな。人生は時間の積
み重ねなのだから」という言
葉、そして「出会いを大切に」、
さらに「語学を重視しよう」
この四つを常に頭に入れて、
これからの人生を生きて欲し
いということ。世はグローバル時代、日本

の企業がどしどし海外に進出
しています。その数は百三十
カ国、一万四千社を超え、ア
メリカだけで三千五百社にの
ぼっています。現に五、六年
前卒業し、英語系私立大を出
て大手証券に入り、語学力を
生かし、ニューヨークでバリ
バリ働いている皆さんの先輩
がいます。いまこそ語学力を
つけて「僕の後ろに道は出来
る」よう世界に視野を向けて
頑張ってください。
私は朝日新聞社を定年にな
った後、大阪府枚方市にある
関西外国語大学に勤めていま
すが、この大学のキャッチフ

のように語学を重視して国際
交流するところが非常に増え
ているのです。
国際化の中で活躍するには、
グローバルな知識が必要です。
それを身につける一つが幅広
い読書でしょう。人間のバッ
クグラウンドが広がります。
読書していて疑問点が出たら、
すぐ辞書を引く癖もつけまし
よう。今は三・五インチの薄
いフロッピーに入った広辞苑
や英和、和英辞典が出ていま
す。携帯出来るし、字も大き
いので便利です。
さらに日記をつける事を習
慣にしたいものです。できれ
ば五年連記くらいのを。随筆
を書くとうると続かない。
要点記録をするくらいの軽い
気持ちで書くのです。二年、
三年前がどうだったか、自分
が「××国へ行った時のこと」
などがすぐわかり便利です。
新聞記者を三十六年もやって
きて大変役立ちました。これ
だけやるには「時間の浪費」
はできないでしょう。
さて私は四十五年前の昭和
二十五年(一九五〇)に高校
を卒業したのですが、激動の
時代でした。第二次大戦の敗
色濃い昭和十九年(一九四四)



工業の校舎に出来た普通科へ行き翌年卒業しました。

思い出は「小松高校新聞」

を発行し、編集長になったことです。お金が無いので、印刷を金沢刑務所に頼みました。題字下の印刷所名を「金」と「刑」からとって「キンケイ印刷所」と苦勞しました。

私は石川啄木の「教室の窓から逃げてただ一人 かの城跡に寝にゆきしかな」という歌が好きです。その通り天守台によく行ったものです。

校庭の一角に天守台があるのは極めて珍しいでしょう。創立九十周年の時、同窓会が天守台への道の両側に桜を植え、「青雲の小径」と名付けました。「すべての道はローマへ」という言葉があります。同窓生の青春のすべては天守台へ通じる」といいでしょう。

春、埼玉県立熊谷中学校（旧制）に入学し、空襲が激しくなったので三カ月後に父の里、根上町へ帰り、旧制小松中学に編入しました。勉強どころでなく、「第一小隊は鉄（くわ）持って、第二小隊は肥たごを持って」芋作りに精を出し、天守台下から校庭はすべて芋畑でした。

そして終戦。昭和二十三年に学制改革で中学は高校になり、二年へ編入、男女共学に目を白黒したものです。それも束の間、昭和二十四年に総合制高校となり、農、商、工業高校とも一緒になり、私は

と感心しました。

なにしろ八月十三日の高知商業との対戦の日は、アルプスと同窓生で膨れ上がり、あふれた人で内野席までいっぱい。熱意が通じたのか、あの強豪に延長十一回で3対4で借敗という好試合でした。

これがきっかけで関西小松

同窓会が誕生、三年ごとにホテルで総会を開いています。いつも二百五十人近く集まります。大体、関西に同窓生は約千人くらいいます。おかげで私も良き先輩らと沢山知り合い、助けてもらったり、楽しく付き合っており、出会いの不思議さ、大切さ、をしみじみと感じます。

平成八年二月十七日には大阪・阪急インターナショナル・ホテルで総会をやります。同窓会本部から関西同窓会に阪神大震災のお見舞いを頂き、これで被災同窓生を招待しようという計画です。関西の連中では本当に同窓会の有り難さを実感しています。

ところで母校の百周年は二十世紀最後の一九九九年です。皆さんも同窓生の一員として、百周年を祝い合い「青雲の小径」を天守台に向かって歩く

ことでしょうか。新しい出会いもあるでしょう。ご静聴ありがとうございました。

(高校2回)

昨年十月二日、創立九十六周年記念として、吉原暢雄先生による「出合いを大切に、視野を広く積極的に挑戦しよう」と題した講演会が開催された。

吉原先生は小松高校第2回卒業生で、金沢大学法文学部卒業後朝日新聞に入社。大阪社会部で主として政治関係を担当されました。その後、高知・奈良・金沢の支局長等を経てレジャー担当編集委員を13年務められ、国内外の旅行記やグルメ評論を執筆。定年後は関西外国語大学で幅広い国際感覚を生かして広報を担当しておられます。著書も「道後温泉物語」「土佐物語」「味・湯・旅ウォッチング」など多数あります。



御存知ですか
-調理実習風景-

平成6年度より学習指導要領が改訂され、一・二年時に男子生徒も家庭科の授業が必修となりました。男子厨房に入らずの世も遠くになりけり、といったところでしょ

平成6年度より学習指導要領が改訂され、一・二年時に男子生徒も家庭科の授業が必修となりました。男子厨房に入らずの世も遠くになりけり、といったところでしょ

懐旧談

松崎 茂夫

(中学24回)

石川県名の由来について

松本 幸一

先年某役所の方より、福井県の県庁所在地は福井市、富山県は富山市と、殆どの処は県名と市名が同じであるのに、何故石川県は違うのかとの質問をうけました。私は二十年程前に歴史に興味を持ち、昔の事を調べたことがあったので次のように返事を致しました。

徳川幕府が倒れて天皇御親政の御代になった時、各藩主は藩知事という名前前で従来は領地をそのままおさめることになりました。然し日時が経つに従って不平不満がおき、再び戦乱が起きては大変、たとえ東京に居住する事が義務づけられ、藩という名前は県に変わり、知事は中央より任命されることになりました。所謂廢藩置県が行われ、金沢県、大聖寺県が誕生しました。

然し明治四年十一月に僅か四カ月で大聖寺県は金沢県に合併され、代りに能登に七尾県が誕生しました。金沢県は河北郡から南、加賀一カ国のみとなり、県庁所在地が金沢

では北にかたよりすぎるとの理由で、明治五年二月当時の石川県本吉、現在の美川町の旧奉行所跡に県庁を移し、郡の名前をとって石川県と改名しました。

明治五年九月、七尾県は解体して能登四郡は石川県へ合併したので、明治六年一月再び県庁は金沢へ復帰したが、金沢も当時石川県金沢町であったので県名はそのまま石川県として今日に至っているような訳であります。(中学29回)

大先輩と小後輩と

本谷 勇

先日、神田神保町の古本屋をぶらついていて、ひょいと「中谷吉郎随筆集」を見つけたので買って来た。

どんな本でも積ん読主義の私が一晩で一気読みし、翌日には名著「雪」を捜し求め、これまた一挙に読み終えた。

中谷先輩(ちょっと馴れ馴れしいがお許しを)の雪の研究は、勿論、世界的物理学者の実力であるが、軽妙で含蓄ある随筆もまた有名である。

前々から私は「繊細ですぐ融けるあの樹枝状の雪の結晶の写真をどうして撮るのだろ

う?』と思っていたが、『マツチの軸の先をちょっと舐めて唾の滴を硝子板につけておいて、今一本のマッチの軸で結晶を吊しながらその唾に垂直に立てて撮る』のだいとも簡単に書かれているのを見て、ちょっとハグチを喰わされたようであったが、別頁に『実は、そう易しい実験でもないのである』とあり、当然ですよねーと得心した。

ところが、雪の結晶の切口を顕微鏡で見たり写真を撮る時には安全カミソリの刃で切っていたのだと書かれると、また、びっくりである。

大先輩の世界的研究がマツチや唾や安全カミソリなんぞで行われていたことが世間に知れる?と、何だか、われら小後輩としては申し訳ないような気がするのである。

中谷先輩は偉大な科学者であり文筆家であると同時に丸谷焼などにも造詣が深く、特に南画への打込み方は大変なもの、墨は唐墨、判は著名な篆刻家の作で朱泥を使い、紙は玉版箋といった具合で、没後には「中谷吉郎画集」が刊行された程である。

『天は二物を与えず!』の筈

であり、俺の一物が中谷先輩に用立てられていたのだ」と思うことにしたら嬉しくなり、卒業後47年になるまで大先輩の著作を読まなかった恥ずかしさも忘れてペンを走らせた次第である。(中学46回)

源氏物語をきく会

松本とし子

谷崎潤一郎の新訳源氏物語が世に出たのは、女学校在学中のことだった。どんなにそれがほしかったことか。しかし私には高嶺の花にすぎなかった。卒業後、公園の中の、常盤文庫でそれをみつけた時は本当にうれしく、親にかくれてそれを読み終えたことは、私にとっての、青春の一ページとなった。

戦後のきびしい生活が少しずつ余裕が出来てきた頃から、いろいろな源氏が世に取りざたされるようになり、その中に、村山リウ先生が、東京と大阪で講義して居られる話も聞こえ、一度でもいいから聞いてみたいと思っていたから、それがテープという形で発売され、私もそれを購入することが出来た。

それは村山先生が原文を少

し読んで、その後先生一流の解釈をするというものである。その頃六〇近くになって、大層寝つきが悪くなって困っていた私は、これを子守歌にして寝るくせがついて、二百余りあるテープを、何回もくり返し聞いていたが、そのうちこれを自分だけのものにしておくのは、勿体ないと思いはじめた。そこで「コーヒ」を飲み乍ら源氏物語を聞く会というのを作ってみたらと思いたった。

たまく／＼クラス会の席上でこの話をした所、忽ち十名の申込みがあった。毎月第一と第三の木曜十時に集って、テープを二時間聞き、お昼を食べ、一時まで、おしゃべりをして帰るといふ楽しい会になった。まじめに勉強しても、五年かかる予定だったが、今日はお花見、今度は忘年会とよくさぼっては、わいわいさわいで楽しんだ。時にはみんな温泉に行ったりで、とうとう七年半の歳月が流れ、昨年十月でようやく「夢浮橋」にたどりついた。勉強だけの会ではこうは続かなかったかも知れない。又駄べるだけの会でも続かないと思う。

源氏物語の原文にふれ、村山流の解釈に納得し、紫式部の精神に共感したこの歳月は、私達の老後に又とない色どりをそえたいきがいであったと思う。
(県女29回)

俳句

昼餉

劍崎 富枝

ぬかご飯炊く臆病な塩加減

二人いて二様の昼餉年つまる

きぐちこへいの話となりて

しぐれけり

(県女31回)

是我当道

高熊美津江

わが母校の石川県立小松高等女学校跡地にありました、小松市立女子高等学校に箏曲が導入され、昭和五十年春より当道音楽会既豊子師(県女14回)の門人として奉職致しました。当道とは文字どおり「この道」とか、自分の学ぶ道の意味であり、中世以降当道に属した歴代検校によって

箏曲地歌が受け継がれ、今日の音楽団体の中に当道音楽会(会長人間国宝菊原初子)として発展しております。

「三十年目に母校ありし地に箏曲講師として迎えられ、身の引き締まる思いで一杯だ

女学校時代の恩師のお顔が目に見え、五月六日「晴」

二十一年前の日誌を繙きながら歲月の流れの速いのに驚いて居ります。週二回の登校

ですが、歴代の校長先生何方にお会いしても「ご苦労様。お願いします」の一言に励ま

されて参りました。生徒は背筋を伸ばし、良く稽古に励んでくれました。

昭和五十五年八月八日には同好会として、金沢市で開かれた第四回全国高等学校総合文化祭邦楽部発表会に十数名

出演。翌五十六年七月より第一回石川県高等学校総合文化祭が始まり、本年第十五回まで続けて出演することが出来ました。六十年春、体育館運動場生活学習館の整備充実と

高校生活急増の為、加賀八幡地内に新校舎建設移転。その夏第九回高等学校総合文化祭邦楽発表会に石川県代表として生徒十三名と盛岡市へ出発。

真に生徒と共に箏曲行脚でありました。その旅行の途中、中尊寺に詣った折り、小松も歴史と詩情のある所、小松を織り込んだ箏曲がひとつ欲しいと思いました。

その後、石橋令邑作詞、高野喜長作曲、奥の細道「小松抄」を平成元年九月に頂く事が出来ました。生徒も心して

良く稽古して下さり、平成六年二月予餞会に尺八西瀉梓山先生、岸八重子教諭(高校19

回)、内村信子さんの御協力でお演奏、発表する事が出来ました。当日はテレビ小松の取材とあって、金屏風に緋毛氈

と舞台装置も晴れがましく、学生服姿の生徒三名も嬉しさ

一入の様子でした。小松市立女子高等学校も平成八年春には大きく変わります。これ迄学生の皆さんと歩

んでこられました事、学ばせて頂いた事を有り難く感謝致しております。(県女33回)

奥の細道 小松抄

作歌者 石橋令邑(れいけい)
作曲者 高野喜長(のろしげ)
歌詞 高野喜長(のろしげ)

一、元稹の 二、五十年 江戸をたち
文月なほ 加賀に入る
二、しおらし 小松吹く風 鼓すす
き、そよぎわたたりて、心ゆくなり
三、青藤を登る 多太の社に しのぶ
れば、甲の下、このうさあわれ
四、那谷寺の 岩山はだを 秋風の
ひとしお白く、さやかにふける



風景応援祭

戦後50年の変遷たどる

山口富美子

コマツ栗津工場OB会は九月十九日、小松市内の同工場と小松工場で、戦時中に勤労動員学徒として働いた人を対象に工場見学会を行う。戦後五十周年の節目を迎え、両工場で苦勞を共にした仲間が再会し、工場の変遷をたどりながら当時の思い出を振り返る。……と言う北国新聞の記事を見まして、懐かしさに胸が躍り、当時小松鑄造満庵履帯工場、油と汗にまみれ働いて

いた、学友九名を誘い合わせに参加いたしました。定員五十名という処、八十七名の参加者があり、二班に別れ一班は男子生、小松中学、小松工業、小松商業、石川師範、金沢商業と市女の三十九名、二班は県女四十八名で、最新の技術を導入された栗津工場の組立、ライン・トランスマッション工場を見学、ただ目を見張るばかりでした。次は、戦時中そのままに残されている小松工場内の建物には、懐かしさが込み上げ、感動しました。当時十六歳の乙女、作業服に胸当前掛、ミトンのような大きな手袋、それに目鏡、頭には大黒様のような帽子を被り、油にまみれて戦車の履帯の穴あけ、面取り(グラインダー)で火花を散らし、かなりきつい仕事を、お国の為、と一日も休まず通った事、食券をもらって食堂へ行った楽しかった事、男子生徒とのいろんなエピソード、今は亡き恩師の面影、等々次から次と思ひ出され涙が滲む思いで友と話し合ったものです。鑄物工場の見学を終え、栗津工場別館ホールでの昼食会、懇談会では、当時の日記



を克明に読み上げて下さった方、勤労働員学徒の数は、現在記録に残っていない事、男子生は戦後五十年、熟年期を迎えられた今、当時の学生服に巻きゃはんとした姿がどうしても結び付かないなど、話に花が咲いて、楽しいひと時を過ごしました。

帰りにはお土産まで頂き、小松駅までバスで送って頂きました。
コマツ栗津工場、OB会事務局の皆様方、本当に有難うございました。(市女19回)

「天守台」「天主台」

清水 郁夫

小松同窓会会報第六号(平成五年七月五日発行)で、「天主台の追憶」の拙文を寄せましたが、会報九号で、恩師の安田進一郎先生から、「天主台」と「天守台」について質問をうけました。

私自身は、「天守台」「天主台」のいずれでもよいと理解しており、また「天守台」は懐旧の情をもって一般化していることから、会報名は勿論変える必要はないと思いません。林屋辰三郎氏は、正しくは「天主」と記すべきとする(河出書房発行『日本歴史大辞典』)が、ただこの「天守」「天主」について、参考になればと思ひ書いてみました。

「天守」「天主」は、近世城郭の中核である本丸に築かれた高層の櫓、楼閣―天守(天主)閣ともいう―をさし、城主の領国支配の象徴でもある。

江戸後期の『群書類従』には、天文十九年(一五五〇年)に生島宗竹が著した『細川兩家記』が集録されている。そのなかで、永正十七年(一五

二〇年)二月十六日夜、摂津伊丹城のこととして、「天守にて腹切ぬ」とある。『細川兩家記』の原本は現在なく、塙保己一校訂によるこの「天守」の部分は、別の写本では「しゅてん」「主殿」「てんしゅ」とあり、原本が「天守」と記されていたかどうかは、疑問が生ずる。

江戸中期の『遺老物語』に集録される『永禄以来出来初之事』に、永禄元年(一五五八年)尾張楽田城で、高い壇を築きその上に矢倉を作り、「殿守」と記されるが、永禄元年については疑問がある。

松永久秀が將軍足利義輝を暗殺した永禄八年に、彼によって完成した大和多聞山城に四層楼があることが、興福寺の『多聞院日記』にみえ、これが城郭に重層高樓が確認される信頼性の高い最初の史料である。ただ「天守」「天主」などの表現はない。

永禄十二年、織田信長は將軍足利義昭のために、二条城の造営を始めたが、『元龜二年記』(一五七一年)七月二十四日条に、二条城「天主之前」で、上京町衆舞踊遊行を催したとあり、これが「天主」

の初見である。

神道家吉田兼見の『兼見卿記』では、元龜三年近江坂本城、翌年二条城、摂津高槻城は「天主」とし、天正二年(一五七四年)山城勝竜寺城は「殿主」としている。

さて、近世城郭史で一時期を画するのは、信長が天正四年に築城を始めた安土城である。この安土城については、織田家の佑筆太田牛一の慶長五年(一六〇〇年)著とされる『信長公記』に詳しいが、「安土山御天主之次第」とあり、『兼見卿記』も「天主」と記す。また『安土山記』は「殿主」、堺の茶人の『津田宗及茶湯日記』及び江戸初期の『太閤記』は「殿守」とし、諸文献は一致しない。貞享四年(一六八七年)の考証にもとづく『近江国蒲生郡安土古城図』ではじめて「天守」と表記されている。なお、現在安土城址には、「天主閣址」の標柱が建っている。

もっとも、「天守」の表記は天正年間に入るとふえ、『多聞院日記』では、天正七年大和井戸宿(城?)「天守」とある。この点で注目されるのは豊臣秀吉の書状である。

天正十一年(一五八三年)秀吉は越前北庄城を攻め、柴田勝家を滅ぼしたが、そのことを報知した卯月二十五日宇喜多秀家宛の書状では「天主」とあるが(小早川文書)、二日後の二十七日毛利輝元宛の書状では、「天守」と記している(毛利家文書)。

また江戸期でも「天主」の用例が多く、例えば、万治年間(一六五八〜六一年)初版の浅井了意作の仮名草子『東海道名所記』でも、駿府城、江戸城について、「天主はない」と表現している。

以上、「天主」から「殿主」「殿守」、そして「天守」への変化をみたが、この変遷は、城郭のもつ軍事的政治的機能やその歴史的背景の変動と密接な関係があり、またそれぞれの用語のもつ思想上の意味の相違も無視できないが、残された紙面も少なく、割愛せざるをえない。ただ、文献記録が、これらのことを明確に意識して表記しているとは限らないことを、付記しておきます。

(高校6回 小松高校校長)

就職に想う

米谷 恒洋

「超氷河期」と言われる就職戦線、学生諸君の心中を察するに余りある一年でした。昭和三十七年「銀行よさようなら」「証券会社こんにちは」と言われた時代に、何等苦勞もせず北國銀行に入行した私には、想像も出来ない現実です。さりとて銀行の置かれた状況は、当時と比較にならぬ程厳しいがあります。

バブル経済崩壊の後遺症に苦しみ、四十兆円を超える不良債権の処理に喘いでいるのです。信用組合、第二地方銀行の経営破綻が相次ぎ、都銀の巨額な損失事件が発生するなど、まさに危機的状況にあり、生き残りを賭けた戦いが展開されています。こうした銀行が淘汰される時代に、今年は学生諸君から一〇〇〇通を越す資料請求があり、四〇〇人にのぼる面接応募がありました。

いずれも素晴らしい学生ばかりで、バブル時代と比べてレベルの高さに感心すると同時に、選考に苦勞しました。四大卒は六十名の採用を決定しましたが、私は内心してやっ

たりと快哉を叫びました。出身高校別では泉丘高校に次いで、小松高校が八名と第二位でしたが、東大、東北大、阪大、金大、滋賀大の国立勢に私立では明治、同志社と本當に粒揃いで、内容的には泉丘勢を圧倒していたからです。

人事を担当する先輩として、鼻高々ながら、この大切な宝をどう育てていくか、今から思案を巡らしています。必ずや将来「花の平成八年組」として、北國銀行の中核をなし、期待に応えてくれるものと期待している今日この頃です。

(高校9回)

神様のプログラム

川越外志恵

「ダンケシェーン」「メルシーボクウ」「サンキュウベリーマッチ」「マハロ」「ありがとうございます」と、半月間に五ヶ国語を話す機会を昨年の十月に得ることができました。

高校在学中はボート部員で真っ黒になり、やれインターハイだ、国体だと勉強はそっちのけでスポーツ人間だった私が、和紙ちぎり絵、和紙絵画の指導と展覧会の為に外国

へ行ってきました。

二十七才の時、ある美術品を見て、雷に打たれたように感動してより、不器用この上ない私が指先の仕事に就いて業としてしまっている事は、我ながら人生不思議と思っていました。

先だってラジオで昆虫の生態という話の中で「それぞれ昆虫に神様のプログラムがあるんですよ」と言うのを聞き、あっ、人間もそうかしら、アラブ系、ラテン系、ゲルマン系、等々顔立ちも産まれる国も決められていて、あんたは日本でこの仕事に就きなさいよ、なんて決められている、生かされているのかな、出逢う人達もプログラムかな、神様は私の人生へは、けっこうシビアなプログラムを組んでるな、でも遅ればせながらギフトを戴いたかな、一生懸命



ウィーン・オペラハウスにて

命に創作している時にふっと「神様の手」が降りてくると感じる時があるから。

子育ても終わったし、これからも、和紙と共に生きてゆくのが、きっと私へのプログラムと信じて、人生のエピソードまで、コツコツとやってゆきましょう。(高校17回)

落ちこぼれの思い出

高橋 直也

晩秋のある日、会社で一本の電話を受けました。向こうには、懐しき友の声。打合せを中断して、周囲をばばからず無意識にでる小松弁。

聞けば、母校の同窓会会報に寄稿しろとのこと。心とは裏腹に承諾してしまいました。学生時代落ちこぼれの私としては、日々模擬試験の偏差値を眺めては溜め息をついていたことが思い出される訳ですが、そんな中で、文化祭で上映すべく、夏休みを通じて制作した8ミリ映画が、ひとつのエピソードであったと思います。

そもそもは、当時の新聞部のメンバーが中心で制作した映画は、25分程度のもので、学生生活の一コマを当時の我々

なりに描いたつもりではあったように記憶しています。

三枚目の役として大根役者を演じ、挿入歌のバックコーラスを歌ったりと、今思うと良く恥も外聞もなくやったものだと思えてしまいます。

当時の監督、撮影、各々のスタッフとは、今では全く連絡もとれていない為、今どこで何をしているのかも判らないのが誠に残念です。

唯一、手元に挿入歌のカセットテープだけが残っており、時折カーステレオで流しながら、青春の頃に思いをはせることもあります。

今にして思えば、受験を控えて、良くあんな事に時間を費やしていたものだと思うのですが、逆にそんな道草じみたところが、思い出になるというのも何やら皮肉なところ

です。高校を卒業して18年の歳月が過ぎ、その間、東京、福島、新潟、米国とよその地で暮らす年月を重ねて来ましたが、想いはやはり、故郷小松にあります。盆・暮れ・正月は故郷で旧友と共に杯を重ねるのが、心の愉しみです。

(高校30回)

追悼

前号(第10号)で、関西小松同窓会会長丸次英治氏(中学46回)より、阪神大震災における小松同窓会員の犠牲者は幸いになかったとの報告を戴き、胸を撫で下ろしていました。

しかし、神戸市長田区在住の酒井兼二氏(中学28回)が震災により奥様とともに他界されたとの訃報を八月十九日、ご子息の酒井譲二氏より承りました。晩年は小松中学時代の話をよくなされていたようです。ご夫妻のご冥福と残されたご家族の方々のご健勝を心よりお祈り申し上げます。

小松同窓会総会開催

平成7年度小松同窓会総会は7月7日午後6時30分より、小松市日の出町、ホテルサンルート小松で開催されました。当日は、梅雨前線が本州上に停滞し、蒸し暑く、雨が降ったり止んだりという気象条件でしたが、年に一度の総会が本年は七夕に当たっており、会員、教職員合計205名が織女星、牽牛星にあやかり、再会を喜び合いました。

上出雅彦氏(高校22回)の司会で幕を開け、総会、懇親会の順で進行しました。仲井信雄会長、清水郁夫校長は、共に挨拶の中で、4年後の平成11年に迫った創立百周年の記念事業に対する会員の理解と協力を要請されました。



本年は役員改選の年に当たりましたが、会長以下の役員は当面留任ということでした。承されました。但し、昭和52年以来18年間に亘って副会長を務められた南愛子氏が顧問に就任され、後任の副会長に宮西すず子氏(県女21回)が就任されました。

その他総会の議事は総て滞りなく承認され、引き続き懇親会に移りました。常に若い亀田作雄氏(中学22回)の「乾杯」で開宴し、懇親を深

めました。久しぶりの再会を祝し、差しつ差されつ談笑は大いに弾み、時間の経つのを忘れたひとときでした。

宴も漸く終りに近付き、壇上で四校の校歌を声高らかに合唱し、次いで小松中学校有志による「門出の歌」(かつて壮行会等で選手に激励に歌われたもの)の披露があり、盛大な拍手が寄せられました。最後に、大島清蔵氏(中学24回)の発声で万歳を三唱し、次回の再会を誓い合い、9時過ぎに閉会しました。

東海小松同窓会定期総会

平成7年11月23日午後4時より名古屋駅西名鉄ニューグランドホテルで第3回定期総会を開催した。来賓として仲井信雄同窓会々々長・清水郁夫校長・百周年記念事業委員長徳田八十吉様・丸次英治関西小松同窓会々々長・中村市次中部石川県人会々長の臨席を仰ぎ総勢73名出席で開催された。

一部総会には東海小松同窓会々々長の挨拶に始まり、会計報告・役員改選がなされ原案通り承認された。つづいて各来賓からお祝辞を頂戴しました。

二部の懇親会に入り、市川

小松中学関東同窓会

95・6・9

副会長の発声で乾杯の音頭で開宴した。会場は九つの円形テーブルに各卒年度別に着席、中華料理で行われた。場内は酒を酌み交し、三年ぶりの再会に盛り返りました。お酒がすすむにつれ各テーブルへの訪問がはじまり、卒業以来音信不通だった友人、知人の再会あり、幼友達の出会いは有り、それはそれは大変な盛況ぶりであり有意義な一日でした。

予定通りビンゴゲームにより各役員提供の景品が全員に贈呈された。最後に中学・県女・高校の校歌を合唱し、山崎副会長の発声で万歳三唱し散会しました。尚本日の司会の大役は山上孝俊理事(高校10回)が担当されました。大変ご苦労さんでした。

(西部英次郎 高校2回記)



三年毎の関東小松同窓会のある年は休んで、毎年小松中学だけの関東同窓会。東京駅前、ホテル国際観光で三十八名(会員三六〇名余)の出席。二年間の物故会員七名の方に黙禱を捧げる。今回の学年幹事四三回生、金田一郎君の開会挨拶、最長老加藤三忍先輩(33回)の乾杯で開会。賑やかな歓談の間を縫って、ご兄弟の出席で、兄さんの北山盛久さん(34回)、開会中の国会の合間を見て出席の嶋崎謙さん(39回)、最年少の森島邦夫さんからそれぞれ力強く楽しいスピーチをいただく。歓談の盛り上がる中終宴も近くなり、懐かしい校旗をわざわざ持参いただいた中橋孝明さん(47回)のリードで校歌と応援歌を天守台と梯川の流れを思い浮かべながら胸一杯に斉唱。次回学年幹事(44回、45回)北野、川上、林さんの紹介と挨拶のあと、同じく学年幹事の剣崎龍夫君が閉会の辞を述べ散会。会の実務を担当された常任幹事の本谷勇さん(46回)、学年幹事の新動

さん(43回)に感謝いたしました。会員の増えない会だけに、ますますのご出席を念願します。

(中学43回、吉田侑一 郎記)

白楊同窓会便り

◎白楊同窓会役員会

日時 平成7年4月28日

会場 白楊幼稚園和室

決定事項

1 追悼法要の件

2 総会の件

◎行事報告

一 追悼法要

日時 平成7年6月4日13時

場所 本覚寺

参加者 約二百名

祭壇には昭和60年6月より平成7年5月末迄の物故者

二三名の過去帳を供えられ、厳肅に読経の流れる中、委員及び各期代表の焼香。亡き友を偲び心から冥福を祈る。

二 総会の開催

日時 平成7年6月4日17時

場所 粟津温泉かみや

出席者 94名

司会者 古田のぶ氏(男33回)

総会 式次第通り進行

終了後懇親会に移る。

謡曲「鶴亀」 大鼓を嘉宮

さん、太鼓を矢地さんの居嚙子で幕があき、又33回生有志の方々による「奥の細道小松抄」を琴と尺八により合奏された。

次々と歌や寸劇に時刻が過ぎ盛会のうちに終了した。32回33回の皆さんに深く御礼申し上げ報告を終えます。(県女35回 浜野光代記)

白楊会関東支部便り

平成7年も残り少なくなりました。

白楊会関東支部の総会は、4月10日、ガーデンパレスにて、30回生のお世話にて催され、桜の咲き盛る日晴天にも恵まれ、歌あり、民舞ありの楽しい一日の集いとなりました。

その他の事業としては、十

余年ぶりに会員名簿を作り直

しました。

総会出欠のお葉書を参考に

して、30回生の方や、新・旧

の会計の努力により、経費を

かけずに、手作りの名簿を作

って下さって、10月中に会員皆

様のお手許へお届けすること

が出来ました。新名簿を手に

されて、お礼のお言葉を下さ

した方も多く、お喜び頂けまし

て一同安堵致し、来年の総会には是非出席したいと心弾ませて下さっていること期待しております。

願わくは、校歌の一節を刻

み込まれた県立小松高女跡地の碑が普ての校庭の一隅に建立されますことを願っております。一人として、白楊会関東支部便りをお届けいたします。(県女27回 北山寛子記)

みどり会便り

みどり会(旧市立高女)総

会は、8月20日、日曜日に小

松グランドホテルで催されま

した。

経過報告、会務会計の報告

に続き、中出和子(16回)の

挨拶。

いつも乍ら背筋をピンと伸

ばした姿勢に、思わず23名、

ピン、シャンと背や腰を伸ば

したり、本当に、和気あいあ

いのほほ笑ましきの雰囲気。

和田(3回) 高桑(5回)

加納・東川(9回)を盛り立てての(21回) 止めです。八十才台〜六十才台の女性。会食も適量で内容も先ず、スマート。談笑も洩れて参ります。やがて、吉田(18回)新幹事からは、先輩に対して

会の世話に尽くされた三十有余年もの数名に大きく支援の声を贈られました。さぞ白髪混じりの美人も輝かしい気持ちを味わえたことでしょう。それに、今後は、級会などの出合いの席にても年会費(五〇〇円)を集めて貰うようにもなりました。勿論、参加した者一同の気持ちも一緒です。これで、消息を伝え合う連絡費も出来そうです。

明るい晩夏の総会でした。

◆その他の行事報告

九月 阪神大震災見舞状と、

「天守台」会報郵送31

通。

十一月 幹事会。小松同窓

会常任理事(学年別)

の選出の協議。

◆来年の総会予定は8月18日、

小松グランドホテルにて

(連絡先0761(22)7333 橋本)

(市女15回 泉他恵子記)

卒業五十年、真樹の会の記念同窓会について

本年度小松中学校卒業五十年になる私達は、これを記念して次のことを行った。

記念文集『真樹』の発刊

入学の翌年に真珠湾攻撃と

マレー沖海戦。そして敗戦の年に卒業というのだから、級友の多くは軍の学校へ進み、神風特攻隊として戦死またシベリア抑留の悲惨。この文集は戦中戦後歴史の貴重な史料の一つとなるだろう。

長崎市から井上源吾先生、

大聖寺から八日市谷修先生を

迎えて安宅の長沖で前夜祭。

十月三日、同窓会館で清水

校長先生から高校の近況を聞

き、母校記念館を参観、記念

樹の真樹を見、天守台上で昼

食会。



長圓寺で遺族を招いて物故者二十三名の法要。松永昭陽

師ら三人の僧侶の観無量寿経

読経のなか香を捧げる。

粟津温泉ホテル天翔閣で記

念宴。故橋本庄栄君の夫人も

御参加。参加者は両恩師以下

四十八名。五十年の年輪、語

らしい深夜にまで及んだ。
翌四日、十九年八月から愛知県刈谷で緊急勤労動員で汗を揮い、その間に空襲や地震に遭った級友たちは仲井信雄君好意のバスで旧豊田自動織機工場へ向かった。

疾風怒濤の中学時代と戦後の五十年を送った私達も古稀を迎えようとしている。文集に多くの人が書いたように、恩師の薫陶と中学時代にはぐくんだ友情はいつまでも心の糧となっていて冬の安宅の海に立つ白波のような五十年を生きぬいて来たのだ。そんな私達は改めて母校の学縁の偉大さに感謝する記念同窓会であった。

最後に学校長はじめ先生方の御好意と、授業中にもかかわらず丁寧に挨拶の声をかけて下さった小松高校生徒諸君に深く感謝申しあげる。
(中学42回 吉田三郎記)

白秋の天守会

入学の年に太平洋戦争勃発。卒業した年に敗戦。正に戦争に明け暮れた中学でした。教練と勤労動員ばかりで、授業を受けたのは半分程か。

入学定員が百名から百五十名に増員されたため、「お前達の中には、肩が五十人混じっている。」と言われた。戦時特例により四年で卒業。従って昭和二十年三月は、二年が同時卒業している。卒業以来二十年間、クラス会を開くことはなかった。生活に追われて、クラス会どころではなかったであろう。昭和四十年、第一回クラス会開催。以来、ほぼ二年に一回、顔を合わせている。昭和六十年、卒業四十周年記念誌「天守台の追憶」刊行。記念誌の嚆矢となる。平成七年、「天守台の追憶」パートIIを続刊。新・旧顔写真入りで、卒業後の経歴や家族状況、近況・抱負等を入れたい名簿は、好評であった。

名に増員されたため、「お前達の中には、肩が五十人混じっている。」と言われた。戦時特例により四年で卒業。従って昭和二十年三月は、二年が同時卒業している。卒業以来二十年間、クラス会を開くことはなかった。生活に追われて、クラス会どころではなかったであろう。昭和四十年、第一回クラス会開催。以来、ほぼ二年に一回、顔を合わせている。昭和六十年、卒業四十周年記念誌「天守台の追憶」刊行。記念誌の嚆矢となる。平成七年、「天守台の追憶」パートIIを続刊。新・旧顔写真入りで、卒業後の経歴や家族状況、近況・抱負等を入れたい名簿は、好評であった。

十月五日、観音温泉ホテル、楽しい一日でした。出席者名簿を見ながら、顔と名前が一致しない者、二名。五十年のタイム・ラグを感じる。延々三時間の宴会、各部屋での二次会、三更を過ぎても話は尽きそうにもない。宴会半ばに校歌・応援歌の合唱。自前の応援用小旗を打ち振りながらの蛮声。小旗には「天守会」と染め

抜いてある。図々しい名前をつけたいものと思ふ。十数点の候補の中から、級友の投票で決定した。差し障りがあたら、ご寛恕を乞う。全員、古希まじか。青春も朱夏も過ぎて、白秋の年代。心して充実した玄冬を迎えたいものである。
(中学43回 藤田栄進記)

高校20回同窓会開かる

二年前、小松同窓会の司会をする順番が20回の自分達に廻って来た時、司会の中谷公治君の応援に来てくれた諸氏から、自分達の期の同窓会を是非やろうという話が起り、このたびようやく、古西満君の尽力と中川忠海君の奮闘で開催の運びとなりました。なにしろ、もう卒業して後二、三年で三十年が経とうというのに、初めて学年全体の会を

開こうとしたものですから、連絡をとるのが大変でした。幸いにも、学校のコンピューターから住所を書いたタックシールが取り出せることを知り、早速、それを利用してもらうことにしました。ところがいざ出欠の封書を出してみますと、転居先不明で戻ってくるわ、戻ってくるわ。毎日、戻ってきた封筒で学校の棚の中はいっぱいで、中を覗くのが怖いくらいでした。創立90周年記念名簿の住所を基に発送しましたが、なかなか封書が届かなかったとか、全く来なかったとか、いろいろとお叱りを受けました。この紙上をお借りして不手際をお詫びいたします。ただ、いいわけがましいことをいわせていただきますと、私も幹事とすれば十年近く前の名簿の住所を使わざるを得なく、また、準備の日に



も余裕がなく、それでたくさんの方々にはきちんと連絡のとれなかったことをお許し願いたいと思います。私達は現在40代の後半にさしかかり、同窓生の多くが企業戦士やその細君になっていて、当然のことながら、住所も転々としているのだから改めて感じました。なにとはともあれ、幹事の諸氏の奮戦のおかげで平成7年8月13日の当日、山代温泉、ホテル瑠璃光には、82名の出席がありました。
(高校20回 福島洋記)

北本氏 世界2冠達成

ソフトテニス世界選手権

昨年10月26日から31日、25カ国一二〇名が参加して岐阜県で行われた第10回ソフトテニス世界選手権大会において高校39回卒業の北本英幸氏が日本チームの大將として出場、団体・個人とも全勝をおさめ第4回大会以来14年ぶりに日本に優勝の栄冠をもたらすとともに、個人でも世界チャンピオンの座についた。

北本氏は高校2年時(昭和60年)石川県で開催されたインターハイ個人でベスト8に入ったのを皮切りに平成元年・





たこの喜びを経験させたい。」と新たな目標に向かって指導に余念がない。

なお、北本氏には上記の快挙を讃えて、昨年12月1日に小松市より「スポーツ特別賞」が送られました。今後ますますの活躍を期待しております。

お願い

2年とインカレ優勝、平成3・5・6年、全日本総合選手権(天皇杯)に優勝するなど国内では常にトップの座を堅持してきたが、今回の大会では、「こんな素晴らしい試合は今まで経験したことがない。」と本人が言うように、心技体が完璧なまで整い、偉業達成に至った。心よりお祝いを申し上げます。

現在、小松高等学校の図書館には、小松同窓会会員による著作図書が約200冊、専用コーナーに収められており、生徒諸君は折にふれ先輩諸賢の息吹に触れることができます。

このたび、小松同窓会では、創立百周年に向けて、小松同窓会員による著作図書リストの作成を計画致しております。小松同窓会員で今までに著作図書を出版された方、あるいは会員の出版をご存知の方は同窓会本部まで、書名、著者名、出版年月日、出版社名をご一報下さい。既に故人となられた会員による図書も同様に、ご家族、ご友人の皆様のご協力をお願い致します。

また、会員による著作図書を生徒諸君の閲覧用にご寄贈戴ける方は、甚だ勝手ながら同窓会本部までお送り戴ければ有難く存じます。

同窓生を訪ねて

平成7年8月23日、県立高女第4回卒業の西井ゆきさん(寺井町石子)を訪ねし、女学校時代のエピソードを聞かせていただきました。

西井さんは、一八九九年(明治32)、寺井町石子で生まれました。大正5年に県女(能美郡立実科高等女学校)を卒業された後、西井家へ嫁がれ今日まで家事、農業に励まれ、現在は悠々自適の生活を送られています。

訪問当日は残暑もまだ厳しい夏の午後でしたが、蟬時雨の中、質問にも理路整然と応じていただき、とても96才とは思えぬ程の壮健ぶりでした。

一時間半余りに及ぶ対談の中で、大変興味深いお話を数々聞かせていただきました。全てを掲載したいのですが紙面の関係上、割愛せざるを得ませんでした。以下は、その要旨です。

◇ ◇ ◇

西井さんが女学校に入学されたのは何年ですか。

「大正元年程ではないかと思う。私は寺井の高等小学校の一年を終了し、女学校の二年に編入しました。試験があつて、私は大してできたわけじゃなかったが、何とか編入できました。」

校長先生はどんな方でしたか。

「宇野順蔵先生でした。修身の先生で、厳しいが優しく可愛らしいところもあり、いい校長先生だと慕っております。女について守らなければならぬことをいろいろとおっしゃっていました。」

学校ではどのようなことを勉強しましたか。

「もともと能美の実科高等女学校でしたから、裁縫やら所帯の切り盛りやら洗濯などの実科が中心でした。」

実科以外の科目ではどんなことを?

「地理、歴史、理科、数学やらみんなありました。」

(家族の人)——地理で習った中米の国名は今でも沢山覚えていきます。

「コスタリカ・パナマ・ガテマラ……順番に覚えさせられた。そのほかに実習といって豆やらじゃがいもやらを作りました。とっても若い男の先生がおいでまして、いつも百

姓のような着物を着ていました。」

校舎はどこにありましたか。石子からどうやって通ったのですか。

「学校は今の丸内中学校の場所にあります。家から小松まで二里半の道のりを、高堂・荒屋・長田・島田とずうっと歩きました。一生懸命早足で歩いて一時間半はかかりました。毎日歩くので、普通の下駄だったらすぐ歯がすり減って一週間で履けなくなります。ですから薄い歯を入れた。あしたを履いていました。一週間たったら歯を入れ換えるのです。かんからあしたと私たちはよんでいました。自転車もまだまだ珍しいものでしたから、小松中学の人も粟生の方から一人だけ、自転車に乗って通われてました。あとはみんな歩きでした。」

他に何か交通機関を利用されたことは。

「寺井から小松駅まで乗合馬車が走っていました。片道10銭程で、体の具合の悪い時や試験で遅刻しちゃうならん時とかだけ利用しました。道の途中で手を挙げて止まってくれたものです。でもほとん

たこの喜びを経験させたい。」と新たな目標に向かって指導に余念がない。

たこの喜びを経験させたい。」と新たな目標に向かって指導に余念がない。

彼自身も「昨年の広島アジア大会に敗れ、背水の陣で臨んだ大会だけに喜びはひとしおです。今後はライバルの韓国、中華台北に常に勝てる日本チームとなるよう、一層頑張ります。」と新たな決意と共に優勝の喜びをかみしめている。

現在小松私立女子高校で教鞭を執る傍ら、ソフトテニス部監督の立場にあり、「将来は国際大会で大活躍するような選手を育成し、自分が味わっ

たこの喜びを経験させたい。」と新たな目標に向かって指導に余念がない。

どは歩きです。」

——学校行事はどうでしたか。例えば運動会や遠足など。

「運動会は年に一度、秋にありました。種目は今とあまり変わりないと思います。遠足は那谷や栗津温泉や安宅・美川などへ行きました。」

——修学旅行はどうでしたか。

「京都と奈良に行きました。朝、小松駅に集まって汽車で行きました。本願寺やら南禅寺やらいろいろ見ました。学校に行つての初めての旅行で二度とできない旅行でしたから、みんな楽しみにしておりました。年寄りでも京都を知らない時代でした。」

——若い女の子たちですか。特別なおしゃれをする人はいなかったですか。

「別にそのよさな人はいなかったです。昔だからみんな真面目で、(親や先生から)言われたとおりしていました。でもやはり小松の町の人はいきれいな着物を着ているし、私ら百姓の者はあまりきれいはなかった。学校へ着ていく着物も全部自分で縫っていました。」

——昼食はどうしてましたか。「弁当を持って行きました。」

町の人も大抵皆弁当を持って来ていました。住込みの夫婦が小使をしていて、小使さんの部屋でお茶だけ出してもらいました。12月から1月は昔だから餅のはやる頃でしたから、町の人は弁当に餅をよく持って来ました。そうすると、

小使さんがみんなに餅を焼いてやるのです。あのおばちゃん、かたい人だと思えます。」

——小松中学の学生との交流はありましたか。

「私らの運動会を、中学の友達が見に来たことがあったらしいと聞いたことがあります。」



私らが(中学の運動会を)見に行くという事はなかったです。でも、小松中学の先生と結婚した人がいました。子どもができてしまったので、卒業しないで結婚しました。うち嫁さん(婿養子取り)になる人だったので、親も(むしろ)きちんとしてよかったです。」

——卒業後はどうされましたか。

「私は卒業式がすまないうちから、ここ(西井家)へ来て百姓をしました。全部親が決めてしまって、親の言うことを聞けばいいと思っておりました。祝言をしないうちからここへ来て百姓の手伝いをしました。なあーも婆婆知らんがや。あの時分は女学校を卒業してすぐ先生をできたのです。私もせめて一年くらい先生をしたいと思いましたが、先生をすくところか田んぼばかりでした。一日もならしてもらえなかった(笑)。冬は「わらじ」や「裏むしろ」を織りました。当時、小松の茶屋町で2月15日に『石子のわらじ市』がたちました。それに合わせて夜なべして作ったものです。」

——旅行へ行ったりしましたか。「百姓の者は旅行など無かったです。おまいりをよくしました。おまいりをよくすると、御坊さんが旅行に連れていってくれるのです。農協の旅行もしました。でもみんな50歳過ぎてからです。」

長時間にわたる質問にも疲れた素振りも見せず、はきはきと答えていたのだいた西井さん。何よりもその記憶力の確かさには驚くばかりでした。

「私は風邪もひかず、家の人に良くしてもらって幸せです」と淡々とおっしゃる西井さんに、明治の女性の粘り強さと優しさを垣間見る思いでした。「若い時分に、毎日小松まで歩いたことが強い体を作った。それが長生きの秘訣ではないでしょうか。おばあちゃんはこの村で一番働いてきた。」

御家族の方の言葉にも、『西井のおばあちゃん』への限りない、暖かな愛情が感じとれました。

本部だより

◇小松同窓会報「天守台」第11号をお届けします。なお、当会報編集委員の顔ぶれは左記のとおりです。

- 委員長 宮崎 榮 (中学33回)
- 委員 浜野光代 (県女35回)
- 三島明子 (市女21回)
- 中田武太 (高校8回)
- 野田洋子 (高校12回)
- 杉永信幸 (高校18回)
- 益本 周 (高校30回)

編集委員一同、会員の皆様方よりのご意見、ご要望などをお待ち致しています。

◇各期・各ホーム等で同期会、ホーム同窓会等を実施された場合は、代表者の方よりのご一報をお待ち致します。逐次会報に掲載致します。

その場合は実施日時、場所参加人数、話題となった事柄等概要を簡潔にお知らせ下さい。葉書でも結構です。

◇当会報編集委員長の宮崎榮氏が平成七年度の県文化功労賞を受賞されました。

昭和33年に発足された小松市文化協会の中心的存在として活躍し、地域文化の活性化に尽力された功績をたたえて贈られたものです。

おめでとうございます。

第12号の原稿募集

- ◎メ切 平成8年5月30日
- ◎内容 自由(在学中の思い出、近況、趣味、紀行文、俳句、短歌等)
- ◎長さ 六千字程度
- ◎送先 同窓会本部会報係宛
- ◎発行 平成8年7月